記念誌刊行にあたって

学校法人九州学園　理事長　野澤　秀樹

福岡女子短期大学は、2016年に開学50年を迎えます。この節目の年に当たって開学50周年記念誌を刊行することになりました。実は10年前に開学40周年の記念誌が刊行されており、A4判50ページ余の冊子ですが、開学の精神・理念からはじめ40年間の本学の教育の充実・変遷が手際よく整理され、またその間の大学生活の様子が豊富な写真で紹介されております。それからわずか10年にして改めて開学50周年記念誌を編むには、それなりの理由がなければならないでしょう。節目の年として50年目の重みは確かですが、それだけでなくさきの40年に続く直近10年の本学の動向が、今一度開学からの歴史を振り返らせる必要性を感じさせたのではないでしょうか。

本学が開設された1966年は、敗戦からすでに20年が経過し、順調に戦後復興を成し遂げ、高度経済成長という新たな時代に突入しておりました。初代学長となられる釜瀬冨士雄九州学園理事長のもとにひょんなことから短大開設の話が持ち込まれたわけですが、明治末年から60年に及ぶ女子中等教育の経験を有する九州学園にとりましては満を持したときではなかったでしょうか。釜瀬先生は、戦後20年本格化し始めた女子高等教育の一端を担うことに強い使命感をもって短期大学の開設に臨まれました。その事跡につきましては本記念誌にも簡潔に紹介されております。その出発点となる本校地が太宰府天満宮宮司、太宰府町長らの惜しみない協力・支援によって現在の風早の丘に定まったことは、本学の発展を暗示していたように思われます。すでに地元との強力な絆に支えられて、釜瀬先生はここに物心両面に渡る思いを築かれていったのです。

五条から石坂に通じる学園通りを西鉄の踏み切りを越えて、しばらくして右に折れ風早の丘を登る坂道にかかると、両側に50年の歴史を物語る桜の並木が目に入ります。その桜の木々のふもとに石ころを小さなケルンのようにセメントで固め、それらのケルンの間に花をかたどった鉄筋の道路柵が続いています。桜を植え、柵を作ったのは開学期の学生、教職員の共同作業によるといいます。すでに心の教育が実践されていた証のように思われます。坂を上りきって正面に3階立ての建物の上層に福岡女子短期大学と書かれた白亜の建物（1号館）、右手前に赤レンガの5階建ての図書館が人目を捉えます。1号館の背後にある建物も含めて釜瀬初代学長が築かれた成果です。

釜瀬初代学長時代から4分の1世紀にかけての時代は、人口増加、高等教育への女子志望者の増加、経済の好況を背景に、学科も入学者数も順調に伸び続けました。しかしバブルの影響は長くは続かず、30周年（1996年）を迎えるころには、入学者数も下り坂を迎え、21世紀に入ると開学当初の状態に戻ってしまったような情況を呈し始めました。40周年から50周年を迎える10年間は、まさしく低迷の時代でありました。この期に記念誌を編むことは、本学50年間前半の栄華を誇ることではなく、来し方を振り返り、これからのまずは10年、20年そしてさらに50年先を視野に入れた本学の再生の道を真摯に探る機会にしなければならないと思います。